

処理	学 長	副学長	副学長	学部長	学部長	事務局長	学科長

受付

学 長 殿

令和5年 5月26日

令和4年度 教育改善事業に係る取組の実績報告書

標記の件について、採択された取組の実績を以下のとおり報告します。

○教育改善事業の対象となった取組（公募要領）
該当番号 対象の取組

④	アクティブラーニングなど学生の主体的・能動的な学習態度を養う教育
---	----------------------------------

学科、委員会等： 心理福祉学科

申請（代表）者： 引馬知子 印

1. 取組の名称

持続可能性と共生社会づくりを主体的に考える実践プロジェクト

2. 取組の実施単位（「個人」、「組織」のいずれかを丸で囲み、「組織」単位の場合は組織の名称を記入してください。）

個人	組織	引馬知子、江島尚俊、國見真理子
----	----	-----------------

3. 取組実績の概要（実施スケジュールを含む）

（引馬ゼミ） WFP（世界食糧計画）とSDG s の啓発活動を企画し、大学内で必要となるさまざまな相談や調整を学生たち自身が行い企画を実現した。在学生のSDG s の認知度の向上、SDGs達成の推進を図ること、WFPの活動内容等を知る機会を設けることを目的に、学内にポスターや卓上ポップの掲示や設置を工夫して行った。食堂やゴミ箱、トイレなど場所毎にあった当該の基礎知識や概要の紹介みならず、ひとり一人ができること等を提案した。

また、共生社会を目指す対話的ダイアログの学外プログラムに参加して、その内容をまとめ報告した。

（江島ゼミ） 下記の4回の施設見学・インタビュー調査、ならびに調査報告会を行った。5月：前期：社会福祉法人横浜中里学園、7月：社会福祉法人川崎愛児園、11月：横浜市教育局教育総合相談センター、11月：NPO法人楠木学園、12月：オープンキャンパスでの調査体験報告、1月：ゼミ内での学生間調査報告会

（國見ゼミ） 下記の社会科見学・ヒアリング調査ならびに調査報告を行った。前期：SDG s 未来都市の小田原に関する調べ学習。伝統との調和を重視した地域社会の持続的発展についてのレポート作成・発表、7月：コミュニティカフェにて共生社会と地域活動の実践例ヒアリング調査、9月：前期に取り組んだテーマの現地調査として小田原社会科見学調査、12月：OCの模擬ゼミ体験「共生社会と私たちの暮らし」にて調査体験報告。1月：ゼミ内で調査学習に関する報告、2月：地域共生空間調査実施

4. 取組の成果

（引馬ゼミ） 学内におけるSDGsやWFPの学生による認知度や知識の向上、さらには学生による能動的な学修や活動の可能性に関わる理解を高めた。また、活動に関心をもった他学年の学生と交流し、募金活動やDCU祭におけるSDG s 探検隊等との連携や取組に貢献した。

（江島ゼミ） 各回の訪問調査において、インタビュー項目を設定した上で聞き取りを行い、調査後には御礼文書発送、文字起こし、調査報告資料の作成を行った。特に、学生にとっては社会調査（質的調査）自体が初めての体験であったため、貴重な取り組みとなった。

（國見ゼミ） 調べ学習と社会科見学を通じてSDGs未来都市の実践のあり方について教科書では学び難い現場体験を通じて理解を深めることができた。学生としては、共生社会の実践例のヒアリングを通じて将来の就労のあり方について具体的なイメージをつかむことができた。調査発表を通じてプレゼン力向上を図ることができた。教員としては共生社会の人権擁護課題についての歴史的経緯の理解を深めることができた。今回の取組を通じて共生社会に対する具体的理解と能動的学習を合わせた貴重な体験することができた。

（3ゼミ合同及び学年を超えた取組） 3ゼミで行った内容について、学生を交えてオープンキャンパスの折等に、報告を行うなど成果の共有と報告を行った。また学生による主体的・能動的な取組を学科内で随時共有し、また助言等を受け、さらに、対外的な学科の紹介等の折が、取組3教員のみならず、他の学科教員によっても紹介された。

5. 課題・問題点

（引馬ゼミ） 学内における企画の実現と学術及び専門性をつなげる活動が初めてであったため、書類作成、文書の表現の仕方、レイアウト等々、さまざまな点で試行錯誤が続いた。また、ゼミの後輩に継続的な実施を目指して説明や共有等を行ったが、必ずしも関心や能動的な行動力が一致しない面もみられた。

（江島ゼミ） インタビュー調査自体が学生にとって初めてであったため、現場で緊張してしまい、スムーズなやり取りができなかった場面が多々あった。次回以降は、よりしっかりとインタビュー練習を実施した上で訪問調査を行いたい。

（國見ゼミ） 自分でテーマを見つけてレポート作成する訓練が学生にとって少ないため、レポート作成に苦労している者もいた。今後はゼミ内で事前学習を深め課題発見訓練をした上でヒアリング調査実施できるようにしていきたい。

（3ゼミ） 成果の共有、意見交換の協働ゼミを計画していたが、学内の急遽設定された他の行事日程等によって、年度内に実施することが困難となった。プロジェクト全体の展開と蓄積のための調整のあり方が課題となった。

6. 自己評価

（引馬ゼミ）学生が主体となって自らの関心について話し合い、SDG s の内容や一人ひとりが取り組めることをまとめ、それを学内のさまざまな場と結び付け、統一性のあるポスターや工夫したポップアップを作成し、それらを掲示や展示していく積極的な活動は評価に値するものであった。掲示や展示について、多くの学生等からフィードバックがあった。またその内容をさまざまな場で報告等した。このような活動の継続及び発展には、さらなる努力や時間を要する。また、ダイアログプログラム参加の成果の公表や共有のあり方は今後の課題となった。

（江島ゼミ）コロナ禍ではあったが、計4回の訪問調査、ならびに計2回の報告会を実施できたことは評価をして良いと考えている。ただし、共生社会の実現に向けた実践的な取り組みの提言にまでは至らなかったため、その点については今後の課題としたい。

（國見ゼミ）コロナ禍で対外的活動に制約がある中で、計5回の調査ならびに報告会を実施できた点は学生の能動的学びを深める点で効果があったといえる。他方で、共生社会に関する調査を深堀して政策提言にもつながるレベルでの新たな知見を得るまでには至らなかった点は今後の課題としたい。

7. 今後の予定（取組成果の活用方法や取組実績の分析・検証、課題・問題点の対策等）

（引馬ゼミ）3ゼミの活動結果を横断的に共有し、学生たち及び関係教員が実践や成果について意見交換したり、分析する機会を設けていくことをさらに目指す。そのうえで、その内容や課題を他の学生や後輩学生に伝えていく機会を最大限設ける。形として残る成果は、保管管理を継続し、今後さまざまな場で役立てる。

今後も、オープンキャンパスや学科紹介等の機会を得て、取組実績の紹介や検証を伝え、さらに学科のアクティブラーニングや発展に役立てる実践的な方策を蓄積していく。

（江島ゼミ）今回の調査報告会資料を印刷・製本した上で、保管管理をしていく。また、製本物は可能な限り学内で共有できればと考えている。インタビュー調査上における学生の問題点については、今後もゼミ内指導を通して改善していく。

（國見ゼミ）今回の調査報告資料の保管管理を行い、成果について可能な限り学内で共有できる機会をもつように努めていきたい。今後もゼミ内指導を通して学生の調査方法の訓練・改善を図っていく。

処理	学 長	副学長	副学長	学部長	学部長	事務局長	学科長

受付

学 長 殿

2023年 3月13日

2022年度 教育改善事業に係る取組の実績報告書

標記の件について、採択された取組の実績を以下のとおり報告します。

○教育改善事業の対象となった取組（公募要領）
該当番号 対象の取組

④ アクティブラーニングなど学生の主体的・能動的な学修態度を養う教育

学科、委員会等：こども未来学科

申請（代表）者：清水 道代 印

1. 取組の名称

「保育実践研究」における能動的学修としてのグループ研究

2. 取組の実施単位（「個人」、「組織」のいずれかを丸で囲み、「組織」単位の場合は組織の名称を記入してください。）

個人	組織	
----	----	--

3. 取組実績の概要（実施スケジュールを含む）

「保育実践研究」では、4年間の学びの積み重ねを基盤に、学生の興味関心に基づき保育の現代的課題や実践についてグループ研究を行うことで、主体的・能動的な学修態度を養うと共に、学んだ知識を主体的につなげ展開させる力を育成することを目的に、共通の問いを持ち、調査研究（フィールドワーク等）を行った。また、調査研究で得られた知見を分析し、文書にまとめると共にポスターを作成し、DCU際において研究発表を行った。研究発表後は総括を行い、学びのプロセスを可視化し、今後の課題について検討を行った。具体的には以下の通りである。

【研究テーマ】「子どもの育ちと絵本～ESDに視点をあてて～」

【研究の背景と目的】研究の背景と目的
現代社会は不確実な時代と言われる中、地球環境や戦争、格差社会など様々な問題が危惧されている。保育においても、子どもの創造力や批判的思考、コミュニケーション力や協働性等、いわゆる21世紀型スキルの育成をいかにして実現するかが課題である。絵本は、幼稚園教育要領や保育所保育指針においても重要な環境のひとつと位置付けており、子どもの自己形成や共感性、協調性を育てるなど情緒や対人関係の発達に関係し、児童期以降の読書推進のためにも大きな役割を担っている。また、読み聞かせには読み手である大人にも影響を与える、相互作用をもったコミュニケーションであることも明らかとなっている。本研究では、子どもの育ちに重要な役割を果たす絵本について、ESDの視点から検討する。まずは、ESDの視点と絵本の役割について整理し、先行研究で明らかになっているESDの絵本を紹介する。続いて、絵本の森美術館の学芸員A氏と子供向けの絵本を多く扱っている図書館司書Bのインタビューをもとに、全身で絵本の世界を感じることのできる「絵本の森美術館」とESDにつながる絵本についての調査結果を示した。

【本研究におけるESDの視点】
世界には生物多様性の喪失などの開発活動に起因する様々な問題があり、これらの現代社会の問題を自らの問題として主体的に捉え、人類が将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保できるよう、身近なところから取り組むことで、問題の解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらし、持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動。ESDは持続可能な社会の創り手を育む教育の視点で子どもにとっての絵本について考察した。

【子どもにとっての絵本】
・大好きな人と過ごすひととき・本は子どもにとって、一つの体験・想像力の豊に育む・言葉の美しさや楽しさを知る・読書のはじまりであることを視野に、先行研究を調査した。

【先行研究にみるESD絵本】（文献調査：2022年7月～9月）
①ESD 貧困をなくそう：『せかいでいちばん おかねもちのすずめ』②ESD 飢餓をゼロに『もったいないばあさんのいただきます』③ESD すべての人に健康と福祉を『アントンせんせい』④ESD 質の高い教育をみんなに『ランドセルがやってきた』⑤ESD ジェンダー平等を実現しよう『ぼくのママは うんてんし』⑥ESD 安全な水とトイレを世界中に『みずくみに』⑦ESD 人や国の不平等をなくそう『せかいのひとびと』⑧ESD 住みつけられるまちづくりを『ぼくのまちをつくろう！』⑨ESD 平和と公正をすべての人に『ぼくがラーメンたべてるとき』⑩ESD 陸の豊かさを守ろう『ぞうさん』⑪ESD 海の豊かさを守ろう『うみぐもものがたり』⑫ESD 文化の継承責任と責任『もったいない』

【絵本の森美術館】（フィールドワーク：2022年7月22日）
 軽井沢 絵本の森美術館
 欧米絵本を中心に貴重な原画や初版本を展示する絵本の専門美術館。季節ごとに開催される企画展や約1,500冊を収蔵する絵本図書館があり、第3展示館には「ピーターラビット」の常設展示がある。ノスタルジックな絵本の世界に浸っていける。
 ・ピクチャレスクガーデン
 軽井沢の風景を紡ぎ、愛でる絵のように美しい庭。英国人ランドスケープデザイナー、ポール・スミザーが手掛けたもの。原生植物を中心としたナチュラルガーデンは、軽井沢の原風景そのもの。風土に寄り添い、式とともに移ろうありのままの自然を全身で楽しむことができる。
 第一展示室では、絵本の歴史について第二展示室では「フェアリーテイルの世界」がテーマとなり、妖精の紹介や絵本原画が展示されていた。「フェアリーテイル」とは主に昔話のことを指し、妖精（悪魔や巨人、小人等の人間の力を超越したような存在）の起源であるブリテン諸島で語り始められた。代表的なものとして「グリム童話」、「ペロウ童話」、「ジェイコブズの昔話」があげられ、人々の間で口伝えされていたため、当初は文章になっていなかった。目に見えない世界でのファンタジーが絵本の世界で表現されている。第三展示室ではピーターラビットの絵本の世界観が紹介されESDの視点ともつながっていた。
 【ESD絵本の調査】（文献研究・フィールドワーク：2022年7月～10月）
 キーワードなどからESDに繋がる絵本の調査を行った。国際子ども図書館、絵本の専門家、学芸員などからのレクチャーなどを手掛かりに検討した。
 ①多様性（文化）「お弁当の日がやってきた」原作 竹下 和男 絵・文 魚戸おさむ（命の尊さ）「わすれられないおくりもの」絵・作 スーザン・バーレイ 訳 小川 仁央（視覚障害）「モグラくんがみたおひさま」文：ジーン・ウイルス 絵：サラ・フォックスーデイス やく：みはら いずみ・「みえるとかみえないとか」 作・絵：ヨシタケシンスケ②個性「あかくてあおいクレヨンのはなし」作者：マイケル・ホール 訳：上田勢子・「りゆうがあります」作・絵：ヨシタケシンスケ・「あたまにつまった石ころが」 作：キャロル・オーティス・ハースト 訳：千葉 茂樹・「あきちゃった！」作：アントワネット・ポーティス 訳：ながかわちえこ
 ③LGBT「タンタンタンゴはパパふたり」文：ジャスティン・リチャードソン&ピーター・パーネル・「すきっていわなきやだめ？」 作：辻村深月 絵：今日マチ子・「くまのトーマスはおんなのこ～ジェンダーとゆうじょうについてのやさしいおはなし～」作：ジェシカ・ウォルトン 絵：ドゥーガル・マクファーソン 訳：かわむらあさこ絵：ヘンリー・コール
 ④自然「ふしぎなガーデン 知りたがりやの少年と庭」作：ピーター・ブラウン 訳：千葉茂樹
 【ポスターの作成・発表】（2022年10月～11月）
 【振り返り】（2022年12月）

4. 取組の成果

子どもを取り巻く絵本の環境を調査することで、絵本の奥深さや豊かさをこれまで以上に実感することができた。子どもの現在と未来と繋がっており、保育者は絵本の役割と可能性を十分に理解し把握した上で、子どもと関わり、絵本の活動を充実させていくことが求められる。また、現場で働く前の学生時代に沢山の絵本に触れることが重要であり、絵本にはESDを展開する上で、欠かせない要素が沢山含まれていることが確認できた。絵本に関わる多くの方々から学び、体験的に絵本の魅力を感じることができたことは貴重な経験となった。また、題解決型の学修を個人で行うだけでなく、それらを周囲と共有することで、学んだ知識を主体的につなげ展開させる力を育成することに繋がった。

5. 課題・問題点

グループ研究の場合は、履修した参加メンバー個々の研究関心から共通の部分を検討し、テーマにつなげていくことから、それぞれの参加者が必ずしも自分の研究関心と重なるわけではなく、研究をまとめて行く上では、問題の焦点化などに困難があった。そのため、教員がファシリテーター的な役割を果たし、方向性を明らかにしたり、問題の整理や研究方法などを提供する必要があった。そのため、能動的に取り組んだという実感を持つことは難しかった。また、研究テーマ設定から調査、まとめ、発表までの時間が短く、学生主体の研究にはかなり時間が足りなかった。また、調査研究には費用と時間がかかるため、今回、教育改善事業費により調査費用を軽減することはできたが、研究を深めるには至らなかった。

6. 自己評価

今回、絵本をテーマにESDに視点を置いて研究を行ったが、実際に軽井沢園本の森美術館に訪問することができ、専門家からのレクチャーを受けたり、自然豊かな環境にある美術館の存在意義や役割を体験的に学べたことは学生にとって貴重な経験となった。また、その経験を共有し、共通の経験から研究ができたことは、他者受容感といった内発的学習意欲につながったのではないかと考える。
 学園祭でのポスター発表では、自分たちの研究の成果を説明することで、達成感を感じられたり、研究の課題を説明することで、研究を今後の保育に発展させるための手がかりに繋がったのではないかと考える。

7. 今後の予定（取組成果の活用方法や取組実績の分析・検証、課題・問題点の対策等）

グループ研究は、調査研究を協働的に行ったり、同じフィールドで調査するなど体験の共有が重要であることから、今後も体験の共有ができるような支援をしていきたい。また、限られた時間での研究になるので、学生がイメージを持ちやすいような導入を行い、少しでも主体的に研究できるような環境を整えていきたい。

処理	学 長	副学長	副学長	学部長	学部長	事務局長	学科長

受付

学 長 殿

2023年5 月 31 日

令和4年度 教育改善事業に係る取組の実績報告書

標記の件について、採択された取組の実績を以下のとおり報告します。

○教育改善事業の対象となった取組（公募要領）

学科、委員会等：

該当番号 対象の取組

11	学生・院生の実地教育の場の確保
----	-----------------

申請（代表）者： 米山光儀 印

1. 取組の名称

大学の地域貢献が学生にもたらす教育的影響について

2. 取組の実施単位（「個人」、「組織」のいずれかを〇で囲み、「組織」単位の場合は組織の名称を記入してください。）

個人	組織	米山光儀、安村清美、伊東秀幸
----	----	----------------

3. 取組実績の概要（実施スケジュールを含む）

学内の5号館一階に「DCU子どもひろば：みらい」を開設した。10月から12月にかけて計9回、テンポラリーな子育て支援のためのスペースとし、地域の子育て支援の場として、親子に開放した。また、「DCU子どもひろば：みらい」は、これまで行政と連携して継続的に行なってきた「けろけろ田園チャイルド」「キッズアート田園」及び学内のオープンキャンパスで開催する子育て支援関係事業を包括したものとし、組織上は地域交流センターに位置付けることとした。また、行政はじめ地域の関係各所に開設について相談・報告を重ね、それぞれの理解・協力のもとに開始した。 開設にあたっての企画・運営は、自主的な組織とし、参加教職員は、米山、安村、伊東、内藤、斉木、番匠、清水、仙田、三政、舟生、新井（貴）、伊藤、古賀、下東、藤井であり教職協働で実現に至った。企画・運営に当たっては、月一回の打ち合わせ会議を開催し、開設に向けて準備を進めた。 「DCU子どもひろば：みらい」には、室内遊具、楽器、絵本などを用意し、複数の教職員の参加及び保育士資格をもった卒業生が保育スタッフとして子どもたちに関り、補助的に学部 of 学生と大学院心理学専攻の院生も子どもに関わることができるようにし、保育・子育て支援実習の機能を有するものとした。子育て支援開催にあたっては、担当教員を配置し、当日の運営及び振り返り、記録を担当した。記録については、教職員で共有できるようにし、次回への参考とした。また、相談室を設け心理職を配置し、子育て支援を必要とする保護者に対して、子どもたちが学内の施設にいる間に、相談ができるようにした。 なお、今年度については、新型コロナウイルスの感染リスクを配慮し、感染症対策を丁寧に実施した。 【実施日時、参加人数】 ○「DCU 子どもひろば：みらい」開室の日程 ・10 月 21 日（金）利用者：大人5人、子ども5人 ・10 月 28 日（金）利用者：大人8人、子ども10人 ・11 月 11 日（金）利用者：大人7人、子ども8人 ・11 月 18 日（金）利用者：大人5人、子ども5人 ・12 月 2 日（金）利用者：大人4人、子ども4人 ○「DCU 子どもひろば：みらい」イベント日程 10 月 14 日（金）けろけろ田園チャイルド（麻生区との連携） 12 月 9 日（金）けろけろ田園チャイルド（麻生区との連携） ○DCU 子どもひろば：みらい 体験会 11 月 5 日（土） DCU 祭（風船ボンボン作り・さかな釣り） 11 月 6 日（日） DCU 祭（風船ボンボン作り・さかな釣り） ○DCU 子どもひろば：みらい 区の木「禅寺丸柿」植樹会（協働：麻生区区制40周年記念事業） 3 月 8 日（水） 午前 10 時 30 分～ 11 時 30 分 参加者：大人2人、子ども2人
--

4. 取組の成果

・実施記録から 各会毎にバスタオル遊び、わらべうた、太鼓、制作のコーナー遊び、野菜の収穫、クリスマスカードづくり、キャンドルホルダーづくり等、教員の専門性を生かした活動を取り入れることで、親子が親しみを持てる居場所となっていた。又学生は授業で花や野菜を植える活動を見せることが出来たり、ゼミで玩具を作りプレゼントする、大きな窓に絵を描く、大型絵本の読み聞かせを行う、DCU祭で遊び場を考える等、自分たちが参加親子にとって出来る事、行ってみたいことを考え親子との交流を図り、楽しんでもらったりお礼の言葉をいただいたりすることで、自己肯定感や自己有用感を感じることが出来る場ともなっている。又参加学生が親子とかかわる保育士の姿を間近に見る機会ともなり、実習を控える学生にとっての学びの場となっていることは大変有意義である。公認心理士や院生も参加されることで幅広い世代が集い、会を重ねる毎に皆が自然と場に慣れ、ひろばがそれぞれにとっての「居場所」となって存在していることが記録から伺えた。

・参加者アンケートから 初回から最終回まで、利用者へGoogleフォームを使用してアンケートを行い、14名から回答を頂いた。アンケート内容は（感想・気づいた点、どこでひろばをしたのか、子育ての不安や心配を気軽に相談したいか）を回答していただいた。回答では、「楽しい玩具や、遊んだことのない玩具などがあり子どもが楽しく過ごせた。」「学生や保育者、先生方、異年齢での交流ができる場が刺激的でプラスになる。」「保育者の方が玩具の消毒なども丁寧にしていただき安心して過ごせる。」「雰囲気がとても良い。」等の回答を頂いた。また、どこでひろばを知ったかについては、ホームページ、友人の紹介、イオン新百合ヶ丘店、DCU祭であった。子育ての相談を気軽にしたいについては、YESが81.8%、NOが9.1%、どちらとも思わないが、9.1%という回答であった。

・参加学生、院生へのアンケート（ゼミ、授業、アドバイジー学生の感想） 10月28日（親子8組参加）には親子でわらべうたを、11月11日（親子7組）は音あそび体験ができるよう楽器を出した。ゼミ生は各回1人ずつ参加した。子どもの年齢に幅があると、走り回る中に乳児さんがいたり遊びを提供する際、焦点を合わせにくい面もある。ゼミ生は2人とも乳児さんにも慣れていたようで、ボールプールで遊ぶ乳児さんの側に座り、時折ボールを渡しながらかみ笑って見守っていた。（齊木）11月18日（ゼミ）：5組（0歳2人、1歳2人、2歳1人）。ゼミで事前に玩具（ひっぱりおもちゃ）を制作し、学生が保護者・子どもに向けておもちゃの説明を行った。その他の活動としては、保育士が小さなミニボトルでクリスマスツリーを作る製作コーナーを提案。子どもの月齢が低いので興味を示さないかと思ったが、ボトルの水の色の変化やシールを使った飾りつけを楽しんだ。興味を持った子どもが自然な形で参加する形が良かった。また学生が大型絵本を準備し、どのタイミングで読もうか迷っていたようだが、男の子が絵本に興味を示した瞬間に読み聞かせを始めた。親子ともに楽しく聞いていた。（「牛乳やさんはーい」「だるまさんが」の2冊）その後、保護者向けに「あかがいちゃん」を紹介）学生にとって、親子が遊ぶ様子を観察し、読み聞かせのタイミングをはかるといふ体験が今回は重要であると思った。緊張していたようだが、学生からは「子どもたちがかわいかった」という感想が聞かれた。11月5、6日のDCU祭では、保育室に学生ボランティアが入った。それぞれの学生がこれまでの学びを生かし、親子のかかわりを見守ったり、必要に応じて援助したりする姿が見られた。又子どものとのかかわりの中でボールプールとトンネルを組み合わせて新たな遊びを創り出すなど柔軟な対応が見られた。ボンボン風船では参加する子どもの年齢差が大きかったが、それぞれの工程の中で子どもができそうなところは見守り、ゴムを止める等難しいところは援助するなど子どもの発達に合わせた対応を考えている様子があった。子どもたちはあずきのザラザラした音を楽しんでいた。また、ボンボン風船が終了すると小学生や4、5歳児には外の探検へ、乳幼児には保育室へ案内するなど臨機応変に対応している姿があった。学生からは「子どもや親子とのかかわりが出来ることは勉強になる」「実習が楽しみになった」「子ども達が喜んでくれることが嬉しい」などの声が多く聞かれた。

・行政との連携（けろけろ田園チャイルド）

2022年度は10月14日（金）、12月9日（金）2回実施した。各回10組の募集であったが、応募者多数により抽選となった。特に12月の実施は、10月の参加者も応募していたことから30組近い応募があり、15組に募集を増やし、前回の参加者にはご遠慮いただき更に抽選を行い15組を決定した。今年度は、麻生区役所が募集と保険等を担当し、大学が主となり、学生（3年・4年ゼミ生：13名）を主体にプログラムの展開や実演などを行った。10月の実施では、ハロウィンテーマに学生が手作りしたモビールなどで表現スタジオの装飾を行い、気に入ったモビールをお土産として持ち帰ってもらった。ピアノによるミニコンサートでは秋の子どもたちの歌の演奏、パンダうさぎコアラの手遊び、学生手作りの動物ポシェットのプレゼントなどを行った。12月の実施では、クリスマステーマに、手作りのリースやクリスマスツリーを表現スタジオに飾り、自由に持ち帰ってもらった。プログラムはクリスマスミニコンサート、ブラックパネルシアター（あわてんぼうのサンタクロース）大型絵本の読み聞かせ（だるまさんが他）、子どもと一緒にダンス、野菜の収穫体験など、大学の資源を活かした豊富な体験ができるものとなった。また、手作りの馬拉カスで演奏に参加、学生がサンタクロースになり、手作りのクリスマスリースを一人一人の参加者にプレゼントするなど参加型のプログラムも展開できた。参加者は、けろけろ田園チャイルドの実施について、川崎市のホームページ、川崎市の子育てアプリ、地域子育て支援センター、区役所、友人知人などから情報を得ていた。アンケートでは、参加者全員がプログラムに満足、また参加したいと回答があった。また、参加者から「クリスマスの思い出ができた」、「娘を抱っこしていただき有難かった」、「準備が大変だったと思うが本当に楽しかった」、「盛り沢山の内容でお土産までいただいて素敵な時間を有難うございました」、「子どももぐずらず終始楽しかった」、「また参加したい」など有難いメールも沢山いただいた。学生へも労いの言葉があり、企画から準備、子どもや親子と関わる経験、3年生、4年生との協働的な学び、保育実践など学生にとっても貴重な機会となった。学生一人一人のやりがいにもつながり、授業で学んでいる理論と実践との往還的な学びに繋がった。

（キッズアート田園）

2022年8月27日（土）、1部：10:30～11:30（2歳～3歳の子どもと保護者）、2部：13:15～14:30（4歳以上の子どもと保護者）※小学生の子どもがいた場合参加可とする。で実施した。コロナ禍であるため6月頃より麻生区役所担当者と協議した結果、両部の上限参加人数を12組とし、会場である造形アトリエをテーブルで区切り、各家族の活動スペースを限定することとなった。また例年、本学の学生が参加者と一緒に活動する体制で行っていたが、今年度は参加家族と接触することを避け、活動記録を撮ることで参加するかたちとなった。当日の1部参加者は、12組：大人16人、子ども16人、2部の参加者は9組：大人11人、子ども13人。活動後のアンケート結果にみる感想からは、土粘土で遊ぶ経験が印象的であったことが分かり、子どもも保護者も普段、余り触れることのない素材を使った経験が良かったようだ。しかし、コロナ禍前の令和元年度と比べると家族間同士の交流がほとんどなく、土粘土を用いたダイナミックな活動にはならなかった。麻生区役所との反省会では「人数制限など感染症対策がある中で、今できる状況の中で一番良い形で開催できた」とする一方、「一緒に楽しむ意識がない保護者をどう巻き込んでいくかが課題」という意見や「イベント型の地域子育て支援は「楽しかった」以上の発見があると良い」という意見も挙がり、以前の麻生区役所担当者としてすり合わせてきた本事業の位置づけとズレがあると思われた。

（区の木「禅寺丸柿」植樹会（協働：麻生区区制40周年記念事業））

2022年度の麻生区区制40周年記念事業：次代へつなぐ「区の木・禅寺丸柿の植栽」（協力提供：柿生禅寺丸柿保存会）との協働企画として、キャンパス：5号館1階カフェテリア前庭に、麻生区の木「禅寺丸柿」の苗木植樹会を2023年3月8日（水）10:30～

11:30に実施した（主催：田園調布学園大学、麻生区区制40周年記念事業実行委員会）。連携事業は麻生区役所地域振興課地域活動支援係がご担当窓口として、柿生禅寺丸柿保存会のみなさまご協力のもと企画された。1月31日に麻生区役所と保存会のみなさまがご来校され、植栽候補地の下見と事前打合せを行った。植栽当日（3/8）は、これまでDCU子どもひろば：みらいに参加した親子のみなさまへ地域交流センターからお声掛けしてご参加くださった2組（子ども2名、保護者2名）の方々、岡田副区長、麻生区役所のみなさん、学生、教職員など総勢30名ほどが参集し、柿生禅寺丸柿保存会ご提供の禅寺丸柿の苗一株の植樹を、保存会のみなさまのご指導の下、行われた。特に親子のみなさんと学生が一生懸命に土かけや水やりを行う姿が見られた。子育て支援室開設を麻生区区制40周年記念と連携して、麻生区由来である禅師丸柿を植樹できたことは感慨深い。ご協力いただいた関係のみなさまに感謝の意を表したい。2023年5月現在、柿の苗は順調に芽吹いており、保存会の方のお話では早ければ今秋にも実が成る可能性があるとのこと。みなさんで大事に育てていきたい。

・地域連携、広報活動

長沢地区への広報の一環として「長沢まちづくり協議会」の広報担当の方に、案内チラシを用いて「子どもひろば：みらい」の概要を伝えた。担当者のSNSを利用して広報していただいた。

なお、「子どもひろば：みらい」の開設に際し、その旨を9月下旬より本学ホームページに掲載し、参加申込受付を開始した。

10月21日の第1回終了後の10月25日にはその様子を記事としてホームページに掲載した。その後も活動内容についてホームページに掲載し、広報活動を行った。

また、高校でのガイダンス・模擬授業、会場ガイダンス時に「大学案内」等とともに「子どもひろば：みらいのチラシ」を配付し、本学の新たな取り組みとして、保育・幼児教育分野への進学希望者を中心に紹介を行った。

オープンキャンパスでは、「子どもひろば：みらい」を活用したイベントを実施し、参加者に「みらい」での活動内容に触れていただいた。

5. 課題・問題点

昨年10月から12月にかけて実施した子どもひろば及び麻生区との連携による子育て支援のイベントより、見えてきた課題は以下の通りである。

1) 学生の学びの場と教員の参画

イベントを含め、9回に渡るひろばの実施には学生も参加した。9回のうち、学生が明確な役割と目的をもちながら事前準備をして参加した回もあれば、親子に触れ合う場として参加した回もあった。どちらも学生にとって学びの機会となるが、子どもと関わる機会だけでなく、保護者から頂く言葉などが学生のモチベーションにも繋がることから、子ども未来学科教員の参画も含めて、授業やゼミ等の場としてもより多くの学生にとって有益な学びの場となるよう計画する。参加する意義を明瞭に学生に伝え、その内容と方法について検討する。また、学科教員へは実施結果から得た学生の学びについてのフィードバックを重ね、実践からの学びと理論の融合が各学生の中で生まれるような環境を創出する。

2) 参加申し込み方法について

子どもひろばは、イベントを除き5回に渡り開室したが、その申込を先着順で一括して行ったため、同じ親子の利用が多く、さらに直前のキャンセルも少なからず出た。このことから、地域の親子がひろばを有効に活用するためには、申込方法を1回ごとに案内する等の工夫が必要である。

3) 子育て講座の実施

子育ての悩みを相談できる場として別途相談室を用意したが、利用する親子にとって悩みの相談だけでなく、子育てに役立つ知識や情報を得られる場の需要があると思われる。よって、各教員の専門領域を生かした子育て講座の企画及び実施を検討する。

6.自己評価

子どもひろば「みらい」の開設にあたっては、基礎研究として一般財団法人川崎新都心街づくり財団：郊外地域社会研究調査事業「新百合ヶ丘の地域社会の特性を生かした子育て支援の研究ー地域の子育て支援活動の需給構造の分析を中心にー」（研究代表 内藤知美 最終報告書2022年6月20日）を行い、子育てに関わる「保護者のニーズや地域の実情」を踏まえて、地域の特性にふさわしい形で、大学の資源を生かした子育て支援の実践を行うこととした。地域に子育ての拠点を作り、そこで家族が受けた支援の経験を基に、自ら子育て支援に参画するという循環のある地域社会（まち）づくりを構想しての取り組みである。基礎研究の中で当該地域に求められる子育て支援の要素として、規模の小さい単位の身近な子育て・子育て支援の場の創出、子育て初期からの積極的働きかけと子育てを学び合う機会の保障、社会資源としての大学および学生の参加などの目的をもって子どもひろば「みらい」を開設した。初年度であるため、まずは利用を促すポスター等での周知（広報）、2022年10月～12月にかけてのひろば型5回、イベント型4回の計9回開室した。麻生区の協力や学園祭でのひろばの開室によって、大学での子育て支援の場を地域に広報することは一定の成果を得た。予約制の利用は、常に定員を満たしている。大学の社会資源である、保育系学生の参加、心理系学生の参加および保育士、保育者養成大学の大学教員の参加、公認心理士の参加など、多様な人的資源の活用ができた。丘陵地での参加を促す駐車場の利用も有効であった。開室にあたっての安全マニュアルの整備や支援者による振り返りの時間、簡単な記録などを整備した。麻生区の子育て支援者の参観などもあり、大学の子育て支援の実践が広く地域の子育て支援への波及効果も見られた。初年度は、開室にあたっての環境整備（人的・物的）、子育て支援に関する利用者のニーズや利用者の特性などを把握することができた点が評価できる。地域にある大学の特性を活用した子育て支援を行うために、支援の理念を明確にするとともに、年間の見通しをもって理念を実践に展開する取り組みを計画していくことが課題である。

7.今後の予定（取組成果の活用方法や取組実績の分析・検証、課題・問題点の対策等）

前述した課題及び自己評価を踏まえ、令和5年度は、5月～7月、10月～12月の間、計16回「子どもひろば：みらい」を開室する計画である。さらに、麻生区との連携事業を加え、学生の実践的学びと地域に求められる子育て支援が、大学として行うにふさわしいものに近づくよう、内容を考案する。特に、子育て支援の必要性について、多様な専門職が学生を交え、実践を通して直に体験することは、通常では得難い学生の学びにつながると考え、子育て支援という地域貢献について、研究的側面と教育的側面の双方からの視点をもって充実させていく。さらに、屋内だけではなく、学内の外の環境も生かした支援につなげられるよう環境を整備する。課題として挙げた、申し込み方法や、講座の実施についても改善を検討し実現する。